

## 2021 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	橋本 和明
研究テーマ	ネグレクト死亡事例における虐待親の認知要因についての研究

### <助成研究の要旨>

幼い子どもを数日間置き去りにして死亡させた事件や車内に長時間放置してパチンコや飲酒をして死亡させた事件などネグレクト死亡事案が後を絶たない。そこには親としての無責任な養育姿勢や身勝手さが確かにかがえるが、親自身も自力では改善しにくいものの方や受け止め方といった認知の問題が存在する。

ただ、虐待親の認知の問題を扱った研究はそれほど多くはなく、そのなかでもネグレクトに関するものは少ない。そこで、本研究では、ネグレクトをする虐待親の認知要因について取り上げ、どのような認知の特徴があるのか、有効な支援のためにはその認知の改善にどのようなことが必要なのかを検討した。

研究の方法として、過去10年間の保護義務者遺棄致死事件の計40の裁判例を分析対象とした。それらの裁判例について「事例のメタ分析」という質的研究法を用いて、認知要因のあり方や変容について分析し、カテゴリーを生成し、そのカテゴリー間の構造化を図った。

その結果、ネグレクトをする親には、優先順位がつけられずに誤った注意をしてしまうこと、目の前にある対象(子ども)が注意から遮断されてしまうこと、注意の持続がなされないためにすぐに関心がそれてしまうこと、全体を把握できず部分的となり注意の分配ができないこと、といった「注意の問題性」という認知要因の特徴があることが判明した。そのことが自己のメタ認知能力にも深く関係してくることも明らかとなった。メタ認知は自分を客観視、俯瞰視できることであり、自分の思考や行動そのものを対象化して認識することであるが、虐待親にはそのような「メタ認知能力の低下」が認められる。そのため、場面や状況に合わないことを平気でしたり、子育てにおいて不適切なことをしてもそれが不適切だと気がつかないでいることも多い。さらに言えば、自己愛的や被害的な認知をしやすく、子どもへの共感性の欠落、子どもの能力に対する「認知の歪み」が生まれ、それが危険を予知する能力の欠如や認知感覚の麻痺という「危険への認知の欠如」となって事態がますます深刻化していくことがわかった。言ってみれば、子どもが危機状態、瀕死状態になっているにもかかわらず放置してしまいやすくなるのである。そこには親の一回限りの放置ではなく、複数回の反復や長期化の傾向があり、最初の放置の時に深刻な事態とならなかったのに「放置しても大丈夫」という誤学習や認知感覚の麻痺が生まれ、ヒューリスティックなエラーが顕著に見受けられる。ヒューリスティックとは、問題解決をする時に簡略化されたプロセスを経て結論を得る方法のことを言い、結論に至るまでの時間を短縮することができるものの、そこには必ず正しい結論に達するわけではなく、認知の歪みが発生しやすくなると言われているが、まさにネグレクトにもそれが現れやすい。

以上の結果を踏まえて、ネグレクトをする親の支援に際しては、その親の認知要因の特徴をまず理解していくことが重要である。ただ、そこにアセスメントするには一場面や一時的なものではなく、多面的、継続的であることが必要である。なぜなら、認知という性質上、その時々でそれが大きく変動しやすいからで、子どもを可愛く思っている、子どもが駄々をこね泣き止まないと親はそれまでの認知を急変して、「自分を困らせている子ども」として捉えたりしやすい。

さらに、親の認知を変えて行動の修正を図っていくためには、認知行動療法などの心理療法を積極的に導入することも考えなくてはならない。その際、支援者は親の否定的な認知要因ばかりを問題にするのではなく、肯定的な側面にも配慮したかわりに留意したい。なぜなら、長年にわたって形成されてきた認知を変えるのは並大抵ではなく、特に認知の修正をしようとする動機付けがそもそも低いネグレクトの親にとっては、急速に意欲を低下させて治療効果を上げにくいところがあるからである。

このようなネグレクトをする親の認知要因に今後は着目しながら、虐待防止がより促進することを望みたい。